26　　吉野山の鬼

文法　助動詞⑪　まし・まほし・たし・ごとし

読解　登場人物の心情をつかむ

山で仏道修行していた高僧が、ある時、涙を流す鬼と出会い、その理由を尋ねた。

この鬼涙にむせびながら申すやう、「我は、この四五百年を過ぎてのにてひしが、人のために恨みを残して、今はかかる鬼の身となりて候ふ。さてそのをば、思ひのⓐごとくに取り殺してき。残りなく取り殺し果てて、今は殺すべき者なくなりぬ。されば、なほ彼らが生まれ変はりまかる後までも知りて、取り殺さんと思ひ候ふに、次々の生まれ所、①つゆも知らねば、取り殺すべきやうなし。②かかる心を起こさざらましかば、極楽、天上にも生まれなまし。敵の子孫は尽き果てぬ。我が命はきはまりもなし。かねてこのやうを知らⓑましかば、かかる恨みをば残さざらまし」と言ひ続けて、③涙を流して泣くこと限りなし。

語注

極楽＝仏のいる浄土。

天上＝天上界。最も理想的な清浄な世界。

【原文】

　この鬼涙にむせびながら申すやう、「我は、この四五百年を過ぎての昔人にて候ひしが、人のために恨みを残して、今はかかる鬼の身となりて候ふ。さてその敵をば、思ひのごとくに取り殺してき。残りなく取り殺し果てて、今は殺すべき者なくなりぬ。されば、なほ彼らが生まれ変はりまかる後までも知りて、取り殺さんと思ひ候ふに、次々の生まれ所、つゆも知らねば、取り殺すべきやうなし。かかる心を起こさざらましかば、極楽、天上にも生まれなまし。敵の子孫は尽き果てぬ。我が命はきはまりもなし。かねてこのやうを知らましかば、かかる恨みをば残さざらまし」と言ひ続けて、涙を流して泣くこと限りなし。

問一　次の「内容わしづかみ」の空欄に本文中の語句を書き入れよ。

鬼は［　　　］を流す理由を次のように語った。「自分は昔は［　　　］であったが、敵に対して［　　　　］を抱いて［　　　］の姿となり、その人と子孫を一人残らず［　　　　　　　　］て、今はもう［　　　　　　　　　　］がいなくなってしまった。［　　　　　　　　］はすでにいなくなっているのに、恨みを残し続けて自分の［　　　］は尽きることがない」と語った。

問二　二重線部ⓐ・ⓑの助動詞の文法的意味と活用形を答えよ。〈3点×2〉

ⓐ〔　　　　　　　　〕〔　　　　　　　　形〕

ⓑ〔　　　　　　　　〕〔　　　　　　　　形〕

問三　［チェック問題］助動詞⑪　まし・まほし・たし・ごとし

(1)　次の活用表を完成させよ。〈1点×4〉

|  |  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| ごとし | たし | | まほし | | まし |  |
|  |  |  |  |  |  | 未然形 |
|  |  |  |  |  |  | 連用形 |
|  |  |  |  |  |  | 終止形 |
|  |  |  |  |  |  | 連体形 |
|  |  |  |  |  |  | 已然形 |
|  |  |  |  |  |  | 命令形 |
|  |  | |  | |  | 接続 |

(2)　次の傍線部の助動詞について、文法的意味を答えよ。〈2点×4〉

1　見る人もなき山里の桜花ほかの散りなむ後ぞ咲かまし（古今集）

2　帰りたければ、ひとりつい立ちて行きけり。（徒然草）

3　紫のゆかりを見て、つづきの見まほしくおぼゆれど、…（更級日記）

4　和歌・管弦・往生要集ごときの抄物を入れたり。（方丈記）

1〔　　　　　　　　　　　〕　2〔　　　　　　　　　　　　〕

3〔　　　　　　　　　　　〕　4〔　　　　　　　　　　　　〕

問四　傍線部①を現代語訳せよ。〈6点〉

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問五　傍線部②について、

(1)　現代語訳せよ。〈8点〉

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

(2)　「かかる心」とはどのような「心」か。二十字以内で答えよ。

〈8点〉

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問六　傍線部③における「鬼」の気持ちとして最も適当なものを選べ。〈10点〉

ア　恨みを晴らす相手もいなくなったのに、なおも生き続けることを余儀なくされていることに、むなしくやるせない思いを抱いている。

イ　敵への憎しみを抑えられず、何の関係もないその子孫たちにまで危害を加えてしまったことを反省し、自責の念にかられている。

ウ　偶然通りかかった高僧に、長年胸の内に抱えてきた自身の苦しみを聞いてもらえたことをうれしく思い、感謝の気持ちを抱いている。

エ　鬼の姿でいる時間が長かったため、人間の姿に戻る方法を忘れてしまったことを悲しみ、情けない思いにかられている。

〔　　　〕

【解答】

問一　涙／人／恨み／鬼／取り殺し／殺すべき者／敵の子孫／命

問二　ⓐ＝比況・連用形　ⓑ＝反実仮想・未然形〈3点×2〉

問三　(1)　〈1点×4〉

|  |  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| ごとし | たし | | まほし | | まし |  |
| (ごとく) | たから | (たく) | まほしから | (まほしく) | ましか  (ませ) | 未然形 |
| ごとく | たかり | たく | まほしかり | まほしく | 〇 | 連用形 |
| ごとし | 〇 | たし | 〇 | まほし | まし | 終止形 |
| ごとき | たかる | たき | まほしかる | まほしき | まし | 連体形 |
| 〇 | 〇 | たけれ | 〇 | まほしけれ | ましか | 已然形 |
| 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 命令形 |
| 体言・連体形  助詞「が・の」 | 連用形 | | 未然形 | | 未然形 | 接続 |

　　　(2)　1＝実現不可能な願望　2＝願望　3＝願望　4＝例示〈2点×4〉

問四　まったく知らないので〈6点〉

問五　(1)　このような心を起こさなかったならば、極楽、天上界にもきっと生まれただろうに。〈8点〉

(2)　敵のことを子孫の代までも恨み続ける心。（19字）〈8点〉

問六　ア〈10点〉

【現代語訳】

この鬼が涙にむせびながら申すには、「私は、ここ四、五百年を過ぎた昔の者でございましたが、他人に恨みを残して、今はこのような鬼の身となっております。さてその敵を、願いのとおりに取り殺してしまった。（その人と子孫を）すっかり取り殺して、今は殺すはずの者がいなくなった。それだから、さらに彼らが生まれ変わります後までも知って、取り殺そうと思いますが、子孫が生まれる所は、まったく知らないので、取り殺すことができる方法もない。このような（怒り恨む）心を起こさなかったならば、（私は）極楽、天上界にもきっと生まれただろうに。敵の子孫はすっかりいなくなってしまった。（それなのに）私の（寿）命は尽きることがない。前もってこういう有様（になること）を知っていたならば、このような恨みを残さなかっただろうに」と言い続けて、（鬼は）涙を流して泣くことこの上ない。

【補充問題】

問１　「取り殺して（　　）」（２～３行目）の空欄には、「き」「けり」のどちらを入れるのが適当か。

問２　「このやう」（６行目）とあるが、この場面における「鬼」の置かれた状況を説明した次の文章の空欄Ａ～Ｃに、本文中の語句を入れよ。

［　Ａ　］と子孫をすべて取り殺してもなお自分の［　Ｂ　］が尽きず、［　Ｃ　］の気持ちもおさまっていない状況。

問３　本文の内容に合致するものを一つ選べ。

ア　多くの人々を殺した鬼は、その報いを受けて地獄にちた。

イ　鬼は、隠れている敵の子孫を探し出そうと躍起になった。

ウ　敵への恨みを晴らした鬼は、そろそろ人間に戻ろうと思った。

エ　鬼は、恨みを抱くとその報いは自分に戻ってくると痛感した。

【補充問題解答】

問１　き

問２　Ａ：敵　Ｂ：命　Ｃ：恨み

問３　エ